

Save The Tropical Forests

ウツク

Hutan

48

森の通信

1998.7.14

【新連載】

◇「真・日本林業論」
—日本と世界の森林を
守るために—
・猪俣栄一

◇フォーラム「木の文化と
木造建築の可能性」
報告集



SARAWAK

◆ケニヤ人の女性。
小さい頃から重しをつけ、
その耳たぶは胸元に達した。
今の少女はこの習慣を受け継がぬが、
おばあさんにとっては今でも美の象徴だ。

[photo & ward]

峠 隆一 [写真ライター]

3 変な種林はダメ！ 森林保護・長寿命化が温暖化を止める！ 西岡良夫

5 日本製紙連合会への質問状 6/3付

6 ウータンニュース「海外種林が
一役??」

7 自治体キャンペーン報告
(大阪市、枚方市)

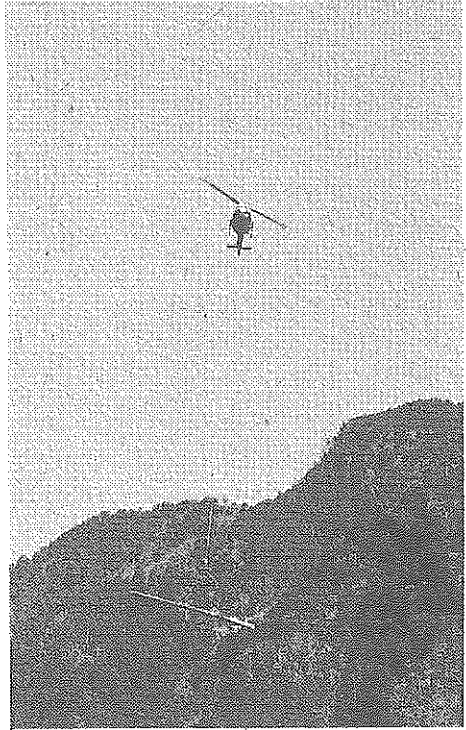
8 連載「真・日本林業論」①
橋本栄一

12 寄稿・川上村木匠塾フォーラムに
参加する巻・大平浩子

15 フォーラム「木の文化と不造建築
の可能性」再録

18 寄稿「環境教育のホリ
ステックなアプローチ」分科会
に参加して。

19 会計より
お便りコーナー



4 奈良県川上村のヘリコプターによる集材作業

ウータン活動報告 98年4～6月

- 98・4・2 出前講座*大阪市いきいき地球館*で「サラワクの熱帯林から」/西岡
- 4・11 「MAIなんていない」大阪集会で話す/西岡
- 4・19 「気候フォーラム」最終会、「気候ネットワーク」発足に参加/西岡、福島
- 4・21 ウータン47号発行
- 4・22 「関西熱帯木材使用削減委員会」最終報告書が作成される
- 4・26 関西環境NGOネットワーク、アースデーのイベントを催す
- 5・12 ウータン、「熱帯材削減や環境保全策」について大阪市と話し合い
- 5・14 ウータン、「熱帯材削減や環境保全策」について枚方市と話し合い
- 5・30 奈良県川上村の「樹と水と人の共生フェスタ98」に参加/永田、井下、篠宮
その後、交流、現地見学
- 6・11 枝打族の最終打合せ/荒木、西岡
- 6・18 出前講座*伊丹公民館*「消えゆく熱帯林」/篠宮

◎この冊子は再生紙を使用しています。
 【表紙】新草木染(古紙40%)
 【中紙】バガス(55kg、非木材紙50%、古紙35%)

《半世紀で森林は半分減った――森を守れば、CO₂排出量12億トンも減らせる!》

地球を覆っていた世界の森林は、50年たらずでほぼ半分が失われてしまった。毎年、伐採や牧場開発、ダム建設、プランテーションのための違法な焼畑などで、世界の森林は約1300万ha以上消滅している。

昨年のインドネシアのアブラヤシ農園の開発による大火災は約120万haになり、面積は同国の商業伐採の熱帯林破壊年間面積に匹敵する。この大火は大ざっぱな推計で、日本のCO₂排出量(約3.3億トン)の5割強、1.8億トン(約英国の分)を排出したといわれる。

世界の森林面積は、30年前に陸地の1/4以上あったが、1980年代半ばに1/5となり、森林伐採の規模は1950年代に比べ大規模化している。特に商業伐採が圧倒的だ。

化石燃料等の燃焼で放出される二酸化炭素は約55億トン、土地利用などの変化で放出は約16億トン。CO₂の吸収は、海洋で20

億トンと、森林で19億トン吸着しているが、大気中へ32億トン増加させている。土地利用での放出のうち、熱帯林破壊で毎年16±4億トンも大気へ放出している。熱帯林を守ったならば、最低値でもCO₂を約12億トン弱排出を減らせる。

「1860年から94年までのCO₂の累積排出量は1/3が森林破壊と農地への転用が原因」とIPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告が述べ、将来を警告している。

熱帯林も寒帯林も切られればCO₂、メタンなどを大量に排出し、森林破壊が地球温暖化を加速させる。「今後50年で林業部門だけで破壊を止め、CO₂を現在より1/2に抑制すべき」と、IPCCが警告している。今こそ原生林保護が必要だ。

森がなければ雨も降りにくく、土質の変化もおきる。シベリヤ等寒帯林の原生林で5~8億トンもCO₂を吸収しており、林が破壊されると凍土が溶け、CO₂等をだし、温暖化を加速させるのだ。

《植林でも森林破壊は止まらない、原生林の保護が不可欠だ!》

やつとスハルト大統領が辞めた。だが、彼の一族や親友の木材王ボブ・ハッサンらでの特定企業が同国の伐採権の41%を手に入れ、森を壊していたのだ。フィリピンでは、マルコスの手によって森林がなくなった。先進国の企業と開発独裁政府やその官僚がグルになって、森を壊しているのだ。

熱帯林に生物種の5割以上が生息している。破壊されて、種の絶滅や住民の生活圧迫を引起こし、再生不可能の状態に追い込んでいる。

一方、98年1月通産省は、CO₂の排出量削減には「植林が有効」と、PRしはじめて、製紙業界も海外での植林事業に力を入れようと

している。政府は、日本のCO₂の排出量削減値6%のうち、3.7%を植林の吸収によるものと算出している。これについて、学者や気候ネットワーク、林野庁の諮問委員会も「削減の根拠無し」と、疑問を投げかけている。工場・自動車公害、建築物の早期建て替え、家庭等の排出などが大きな原因だ。それを削減せずに植林とは本末転倒だ。

ドイツ・ボンで6月2日から始まったCOP4にむけた準備会合で主要議題として、①吸収源問題の数値目標の実際値、②協力実施の方法、③排出権取引、④植林や森林減少等が話し合われた。日本の製紙会社は海外に大規模な植林を計画し、ユーカリ等を植林すると生態系破壊が増えるのだ。

《何で2020年までに500万haも植林するんや?! それより身近から紙の使用量削減と再利用を》

世界の紙・パルプ産業は、約40億本の樹木を消費し、その木材のほとんどが原生林を伐採している。原生林はカナダなどの針葉樹で、伐採が進めば温暖化促進の原因となる。

再生紙使用率はデンマークでは97%、日本は57%で世界2位の使用量。まず減らすことだ。だが、日本政府は97年6月に「世界大植林計画」を提案し、2020年に500万ha植林しようとする。

《建ててすぐ壊す住宅政策、自治体から建築抑制・補修を！》

近年の住宅着工件数は150万戸前後。96年の着工件数は163万戸。昨年は134万戸、今年の予想は130万戸。今まで異常な着工だった。1960年頃はたった40万戸。ちなみに近年の住宅の寿命はたった26年。

建ててはすぐ壊す住宅政策で、すぐ新築する。

ウータンが今年大阪府下自治体にアンケートしたが、型枠の「総量削減が必要」とした自治体は8割以上に上るが、「建築抑制必要」とする自治体は8%しかない。建築抑制、補修が必要だ。

《造るなら、長寿命で、環境に優しい環境共生住宅を》

熱帯材型枠に変わるものとして、再生紙の型枠や間伐材合板などが出始めている。だが、ほとんどの自治体は知らないか、値段が少し高いと言って敬遠する。環境負荷の少ないものが地球に優しく、使って欲しいものだ。

また、関西熱帯木材使用削減委員会で、大手ゼネコン100社へのアンケートは、「自治体が指示ないので熱帯材等の削減をしない」という相互関係が判った。しかしゼネコンは、「長寿命化の建築物推進が8%しかない。」

右の図のようにCO₂の国内発生量の1/3が建築関連で、炭素換算で約8千万トンの排出と推定されている。寿命35年の鉄筋のオフィスビルを、省エネタイプで100年ものすると35%もCO₂を削減できる。

ヨーロッパの建築物では300年ものは結構ある。「やる気」があれば可能でないか。もし建築するなら今後、長寿命化で省エネタイプで、ごみゼロの環境共生住宅が求められる。

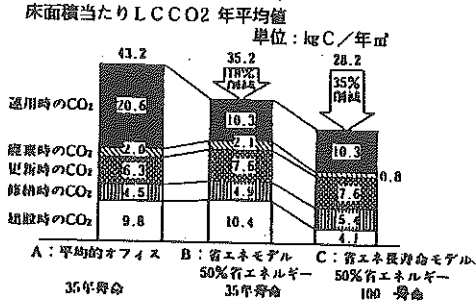
《アルミ使用の建築物はCO₂大幅増加》

表1のように天然乾燥木材に対し、アルミは1375倍も炭素放出させる。アルミ採掘のほとんどが熱帯林破壊によるものだ。輸送時のCO₂排出もあり、住宅をたてるなら国産材のほうが好ましい。

住宅を建設するときに出てくるCO₂についても、RSC(鉄筋鉄骨)造は木造の4倍、鉄筋造の建物は3倍である。窓枠や家具等を木製に変えると炭素の放出はもっと削減できる。

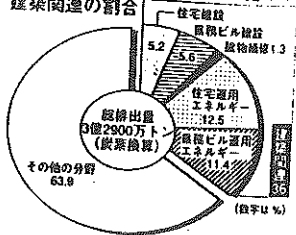
資源は無限ではないのだ。ただ同然のように切り倒されてきた森。今こそ、原生林やその周囲の森を守るために、保護地域を設け、地元の人々に正当な管理を任せるべきだ。木材等の資源を使用するなら、将来の世代につけを残さぬよう「環境コスト」を含んだものになければ、私たちの未来はない。

図 建設のCO₂発生量の側面



オフィスビルのライフサイクルCO₂試算例

1990年の日本のCO₂排出に占める



| 材料 | t当たり (kg) | m ² 当たり (kg) |
|--------|-----------|-------------------------|
| 天然乾燥製材 | 32 | 16 |
| 人工乾燥製材 | 201 | 100 |
| 合板 | 283 | 156 |
| 繊維板 | 345 | 224 |
| 鋼材 | 504 | 3,830 |
| アルミニウム | 4,570 | 11,550 |

表1 製造時における炭素放出量

出所: 大熊 (1997)

| 構造別 | 放出量 |
|-------------|--------|
| 木造 | 5,140 |
| 鉄骨鉄筋コンクリート造 | 21,814 |
| 鉄筋コンクリート造 | 17,747 |

出所: 大熊 (1997)

表2 住宅建設で放出されるCO₂
(1戸 (136m²) 当たりkg)

森林減少、古紙余剰、植林問題等の質問状

日本製紙連合会会長 小林正夫殿

拝啓

私達は、森林保全、リサイクル、企業進出などの問題に関する活動をしている市民団体です。

私達は5月4日付けの朝日新聞及び日本経済新聞の朝刊の製紙連合会の全面広告を読み、その内容が事実を歪め、一般読者に誤解を与える危険性のあるものを含んでいると考え、その疑問点につき貴会のご見解を確認いたしたく存じます。つきましては、下記の関連質問の事項にご回答をお願いいたしたく、ご対応をよろしく願います。

1. 古紙余剰等について

(質問1) 古紙が余っているのは、「ゴミ減量とリサイクルが浸透したため」であるとされ、古紙の需給と供給のバランスが崩れてしまったということですが、「リサイクル55計画」では、古紙利用率向上目標が未達成に終わりました。製紙メーカーの方では、どのような努力を払われたのでしょうか。

(質問2) 古紙100%のトイレ紙を製造している業者を圧迫してまで、大手メーカーが100%バージン・パルプのトイレ紙を量産されているのはなぜでしょうか。

(質問3) 新聞紙はリサイクルの優等生とありますが、「紙バ技協誌」などの専門誌の論文を読むと、今日の新聞用紙をめぐる過剰な品質要求などのために、必ずしもこの広告で言われる「平均45%の古紙混入率」ではないことが示されています。30%そこそこというのが専門家の見解のようですが、いかがでしょうか。また具体的に各メーカー、新聞社の新聞用紙の古紙利用率をお教えいただけるでしょうか。

2. 森林本木減少について

(質問4) 広告では「紙の原料は殆どが製材時に出る残材や製材に不向きな低質材を利用している。しかも多くは、森林増加傾向にある先進地域からの輸入である」と述べられています。

1) 製材や残材の場合、北米等では製材需要が少ない時、あるいは紙パルプ需要が大きい時、かなり良い部分でもパルプ、チップ用に丸太が回されるといわれています。また、オーストラリアでは日本向けのチップ用が製材用より圧倒的に大きい、というデータがあります。製材や残材であれば森林破壊と無関係である、とは必ずしもいえないではないかと思われませんが、どのようにお考えですか。

2) 「製材に不向きな低質材」について、なにを「低質材」とられておられるのか、具体的な例をあげて教えて下さい。私達が伐採現地の環

境保護団体等から問題があると、指摘を受けてきたものだけでも①オーストラリアのユーカリ原生林、②米国の南東部の広葉樹林、③カナダのBC州、アルバータ州の日系パルプ工場、④インドネシアのマングローブ林、⑤沖縄、⑥シベリヤの亜寒帯林など多くあります。日本向けチップあるいはパルプ製造に利用される森林は、皆伐を促進することになり、森林生態系に悪影響を及ぼしている、という指摘をどのようにお考えですか。

(質問5) この広告に出ておられた前会長の会社が資本参加しているカナダBC州のCF社、HS Pulp&Paper社の場合、周辺の原生林等の皆伐を行っていることや環境汚染がかなりひどいと伝えられていますが、どう考えますか。

(質問6) 北米の原生林の減少のスピードは著しいもので、森林の質の劣化について、紙パルプ産業との関係をどのようにお考えですか。

(質問7) 連合会は、途上国の森林減少に関し、焼畑や薪炭材、過放牧等を指摘されています。近年途上国パルプ産業の発展は目覚ましく、熱帯林材をパルプ材としている例や植林のために住民の共有林を伐採・破壊する例、森林火災の出火元になるとの報告が増え、PNG、スマトラ島の例など、どのような見解ですか。

(質問8) 略す

3. 有直本木について

(質問9) 海外の植林活動について今後も拡大するとされていますが、植林は一般的に大規模な土地利用転換を意味することが多く、OECFの開発援助や世銀などの基準では環境アセスの対象にしています。環境、社会面のアセスやモニタリングにどのような配慮をされてきたのでしょうか。また周辺住民との形成合意に関し、どんな努力を払われましたか。

(質問10) 植林は地域住民の雇用と生活の安定をもたらす、とのことですが、植林地の労働は年間を通じ雇用機会が少ない季節労働で、

環境保全・熱帯材削減策が進む大阪市、枚方市

【自治体キャンペーンFrom 大阪④】

西岡良夫

90年から自治体キャンペーンを始めたが、当初は各自治体の熱帯材使用量削減の設定のみを目指した。92年、大阪市や大阪府の首長が記者会見した時、こっちも記者会見した。

内容は「①合板材の反復使用、②使用の時は塗装合板や針葉樹合板、プレキャスト工法等の使用の検討、③関係部局間会議の設置と熱帯林保全の予算措置、④業界への通達、⑤

使用済の再利用」等だった。だが、まだ熱帯林保護についても理解が薄かったんで、熱帯材削減にしぼった。「ほんま、ひつこく使ってもらいたい、建物をようさん建てんようにしてもらわな..」とその後、事務局で話あう。

府下30自治体が削減し、15自治体が環境基本計画を実施・検討したので、やっと建築抑制を話し合いに出した。本来の思いなんや!

《建築物設計指針の環境編を作った大阪市——随分進んだ建築環境策》

営繕部・野上代理、富川係長らと話し合う。5月12日、大阪市へ質問は「①熱帯材削減の今後、②建築物の環境負荷—1)省エネ施設等、2)長持ちのする建築物の実施、3)建築抑制、③家具再利用、④環境基本計画」だ。

①について、大阪市は「2年前に大々的に型枠削減量を調べた。費用がなく今できない。仕様書もあり、複合合板が中心です。事業量は2年前の2/3で1200億円です」と。私達は「コストもあるが、行政がしてもらわな」と。

②1)は、後日送ってもらった『施設建築物設計指針(環境編)』に雨水利用、省エネ施設、太陽光利用、屋上植栽など多くの環境配慮施設を作り、そのノウハウを作った表もあった。市は「太陽光でも補助金が半分あるからできるが、具体的にどれだけ省エネかは出せない。サンヨーさんの物はどうか」と聞かれ、「そこ

までわからへん」と私達は答える。

今回聞きたいのは②2)、3)だ。

2)市は「長寿命化の建物を建てるように考えてる。昭和初期の建物は壊す必要がないと思う。耐震が少し問題だが、建物を壊す依頼は各部局からで、できたら残したいけど。良いものを作っていけば、市民に親しまれ長持ちすると思う。60~70年は充分持つものだ。

3)の建築抑制というても我々は受ける方だ。断われへん。ウータンの抑制という精神は理解できるが..」と。私達は「工夫次第で、もっと長持ちさせれるんちゃうか」という。

④の環境基本計画について「見直し期間は5年で、今度は2000年です」と。私達は「社会変動が激しいので、計画はせめて3年で見直すべきだ」と申し入れた。

随分、大阪市は進んだが、見直しも必要だ。

《98年度中に環境基本計画策定の枚方市》

5月14日、枚方市と話し合い。小池市長公室参事、伊丹生活環境課長など。こっちは5名。

大阪市みたいに進んでないやろから、質問は「①熱帯材使用削減策、②型枠量把握、③環境配慮への方法、④環境基本計画策定状況⑤家具再利用」についてだ。

枚方市は「鋼製型枠で熱帯材使用削減してるが、使用量把握はまだ。建築物の環境配慮に建築廃棄物を路盤材としたり、長寿命化の

建物の設計をしている。維持補修を考えてるが、建て替え依頼は各部局からです」と。「環境基本計画は、98年3月に環境基本条例を制定し、平成10年度中に環境基本計画策定予定で、今後は公聴会、説明会を考えています。家具再利用は情報紙で知らせてます。今後、ごみは12分別の予定です」と答えた。

枚方市もけっこう進んでました。ウータンは今後も各自治体と話し合う予定です。

〈連載〉

真・日本林業論

—日本と世界の森林を守るために—

徳島県熱帯林問題研究会

猪俣栄一

第1回 連載をはじめるとに当たって

◇ はじめに

昨年(平成9年)11月に京都で開催された地球温暖化防止会議(COPⅢ)では、最後まで森林が吸収する二酸化炭素の扱いをめぐる会議が紛糾しました。

一方、今年のはじめに決まった行政改革案の中で、林野庁は業務の方針と内容を大きく転換し、同時に3兆7千億にのぼる巨額の累積債務を、結局は自分達で処理しきれず、約半分を国民の税負担で処理し、残りの額は、本来、国民みんなの財産である筈の国有林の土地や材木を売却して、自分達の長年にわたる国有林経営の失敗の穴埋めをすることになりました。

また、日本の各地では、慢性化する水不足に対して、コンクリートダムに頼らずに緑のダムによって水源を守ろうという考えで、市民達による水源の森の植林が行われるようになりました。

こういったニュースによって、国民の森林に対する関心は、かつて例がなかった程、高まりつつあるように見受けられます。これは大変喜ばしい現象だと思います。

しかし一歩踏み込んで考えてみますと、一体なぜ林野庁はそんな巨額な赤字を出したのか、大学出のエリートを自認する役人がウジャウジャいながら、何故自分達でその赤字を解消できないで、国民にツケを廻すのか、そもそも日本の林

業はなぜ低迷を続けるのか、どうやったら日本の林業は再生できるのか、本当に外材が日本林業の脅威になっているのか等々、国民のみなさんが疑問に感じる事がいっぱいあると思います。

けれども、そういった疑問に対して、政府は国民になんの説明も情報提供もしていません。なんのことはない、国民は何も事情を知らされないまま、国有林の巨大な赤字の尻ぬぐいや、林業構造改善事業といった、いつ果てるとも知れぬ巨額な公共事業支出等の税負担だけを押しつけられているのです。

考えてみたら(或いは考えてみなくても)こんなバカバカしい話はありません。ということで、林野庁や林業者の人達(私はそれらをひっくるめて「林業サイド」と呼んでいます)に睨まれたりおこられたりすることをおそれず、上記のような疑問を、長年林業や木材業の現場を見てきた目で、いろいろと考えてみたいと思って、ペンをとりました。

歯に衣を着せぬ話もたくさん出てきますので、「本当なのかな?この話」と思われる読者もおられましようし、当然反論もたくさん出てくることでしょう。

しかし、それらは覚悟のまえです。日本の林業の本当の再生と、もっと大切なこと、つまり、もうこれ以上日本の森林環境をこわしてほしくないという願いか

ら、本当のことを書いてみるつもりです。

◇ 何が問題なのか

ウータンは、もともと熱帯林保護活動を目的とした団体でした。それがいろいろな紆余曲折を経て、国内林や国産材の問題にまでテーマが広がってきました。その心は、熱帯林材の使用を減らすためにも、国産材の利用の促進、拡大という方向性が出て来たのと、それに関連して国内の森林環境問題にも目が向いて来たのだと思います。

ですがこの問題は、非常にバックグラウンドが大きい上に、アプローチが多岐にわたり、とても一筋縄では行かない問題です。で、ここではとりあえず、次回以降で取り上げる項目とその考え方だけを挙げておきます。

1. 森林の公益性とは何か

森林の保全とか森林が果たす役割ということを考える場合、林野庁をはじめとする林業サイドの人達は、「森林の持つ公益的機能」という言葉をよく使います。これは一体どういう事でしょうか。

詳しいことは次回以降で説明しますが、ごく簡明に言うと、公益的機能とは、森林が本来持っているたくさんの機能の中で、木材資源や薪材の供給機能以外のすべての機能のことだと理解して頂ければよいと思います。

もともと森林というものは、大雨の時の土砂流出や山腹崩壊等の山地災害防止機能や、洪水を防止する流水量の平準化機能、1日とか1年とかの周期での最高、最低気温の差の緩和機能、湿度や乾燥を和らげる機能等の外、い

ろんな動物に採餌、ねぐら、繁殖の場を提供したり、下流域に対する緑のダムとしての貯水機能を果たしたり、大規模になると地球の水循環の重要な輪になったり、近年盛んに強調されるようになった地球温暖化の原因たる二酸化炭素の吸収源になったり、地球の生態系の維持の上で極めて重要で多様な役割を担っているのです（これらの機能の詳細については、次号で説明）。

重要なことは、これらの機能は、人間の社会生活にも極めて重要で不可欠な恩恵を与えているということと、もう一つは、これらの機能は人類が社会生活をはじめずっと以前から存在していたという、二つの点です。

つまり、たとえ地球が水の惑星であっても、森林がなければ人間は社会的生物として今日のような繁栄を遂げることは難しかったでしょうし（その具体的理由は次回に）、また森林の本来の機能は、人類という生物の1種が地球上に出現しようがしまいが、そんなことに関係なくずっと昔から存在する、森林の本質的的属性と言えるものなのです。

2. 公益的機能の評価

森林のもつ公益的機能の認識というか、評価は随分昔からあったようです。江戸時代や更にもっと前にも、部落の裏山の森を伐採したところ、その後の大雨の時に山崩れが発生し部落が大きな打撃を受けたために、それを山の神様の怒りだと受けとめて、以後その森を部落の共有林として何百年もの間、禁伐にして保全してきたという話は、日本のあちらこちらに昔話として伝わ

っております。

この話は、今日的に言えば、森林の持つ山地災害防止機能としての評価と言えるでしょう。

或いは、大きな古木そのものを神として祀ったり、森林は神の居住する場所と考えて神社の境内や裏山の自然林を伐採しないで残したりということ、現実にはそれらの森が神社林（社叢林）として何百年後の現代にまで引き継がれている例が沢山あります。

これなどは森林の景観とか、風致保全効果とか、更には森に接することによって人間が心のやすらぎを得るという、精神的な効果もあるのだという認識といえるでしょう。そして、公益的機能という言葉も、明治中期以降、近代林業の中で使われています。

ですが、この言葉が今日使われているような意味と目的で、殊更に強調されたのは、昭和50年代に入る頃からでした（と私は認識しています）。

つまり第1次オイルショックということも加わり、言うところの安価な外材に押されて、我が国の林業が危機的なまでに衰退しはじめたころでしょう。同時にそれは、国有林の経営が、ちょっとやそつとの経営努力ではどうにも回復できないという様相を呈し始めた時期でもあったのです。これらのことは何を意味するのでしょうか。

3. 戦後の林業の盛衰

第2次大戦後の日本林業や木材産業は、戦災復興とそれに続く高度成長のもと、ほぼ一貫して拡大の一途を辿ってきました。そうした傾向の中で、林野庁は、将来我が国の木材の需給関係

は逼迫するという予測の下に、昭和30年代半ば頃から、それまで殆ど手つかずで残ってきた、ブナ林を中心とする奥山の自然林を皆伐し、スギ、ヒノキに植え替える拡大造林という方式を全国で展開したのです。

ところが、昭和40年代半ばになると、住宅建設や設備投資に支えられて上昇を続けてきた木材需要や価格の伸びは横ばい状態に転じ、円高によって相対的に安くなった米材に押され始めました。

そして昭和54年の第2次オイルショックは木材業界や林業を直撃しました。昭和55年夏から約6年間にわたり、日本の木材産業は史上空前の不況に見舞われたのです。

この未曾有の不況は林業の基礎体力に大きな打撃をあたえました。ことに国有林はその経営体質の悪さから、経営赤字と借入残高を急速に増大させてしまいました。

民有林では、国産材需要の減少、劣悪な労働条件、山林の過疎に伴う人手不足等の悪要因が重なって、林業そのものが衰退しはじめ、人工林、特に国策として推進させられた拡大造林の除伐や間伐が計画通り実施できず、粗放林が増える等、危機的な様相を呈し始め、林業政策に対する不信感さえ出かねない状況となりました。

4. 林業政策の欺瞞性

そうした状況に対応するため、林野庁は林業振興に向けて一層の財政支出を迫られたのですが、国の財政が悪化している時に、林業だけに過大な予算をもらう訳にはいきません。

そこで、水源税という、森林保全のための目的税新設を考えだしました。だが、単に林業へのテコ入れという理由だけの新税では、税負担者だけでなく、政府の内部や大蔵省からも猛烈に反撥されるのが目に見えていました。

それで苦し紛れに考えついたのが、「森林の公益的機能の維持」という錦の御旗であったのです。当時全国的に水資源の減少が心配されだしてましたから、効き目があると考えた訳です。

ということは、林業へのテコ入れを、一般的な森林の公益的機能の維持へとすり替えた訳ですから、この錦の御旗には、始めから欺瞞性があったと言えますでしょう。

当時の林業サイドの言い分は、「下流の都市部で不自由なく水が使えるのは、上流で緑を育て、山を守っている林業のおかげ」であり、「今すぐ税金を注ぎ込めば、荒れている森林は容易に回復するが、手当がおくると回復が困難になり、下流では将来洗濯にも困るようになる」というものでした。

下流の都市部の住民は、山の森を見たこともない人が多く、事の真偽も判らないまま、この脅しとも取れる林業サイドの言い分を鵜呑みにしてしまったのです。

それが今日の、流域協議会への資金抛出とか、分収育林への出資とか、枝打ち族や下刈りボランティアとか言う形につながって来たのです。

5. 真の国民参加型の森造りを目指そう

緑を育て山を守ることに、国民のみんなが関心を持ち、参加するということは素晴らしいことであり、とても大

切なことであります。

しかし説明したように、過去の林業サイドのキャンペーンは動機が不純であり、目的のすり替えがありました。第一、林業サイドが力説する奥地林の荒廃についても、「何故そんなに荒れたのか」という本当の原因の説明が全く欠けていました。

これでは騙しのようなものですし、林業不振の根本原因を国民の前に明らかにせず、現象面だけを示して納税者の感情に訴えるやり方を続けている限り、日本の山や森は、いつまでたっても回復しないでしょう。

またこのように多額の税金を投入して人工林中心の林業経営を支えることが、国民が本当に望む豊かな森林環境や水資源を回復することになるのでしょうか。

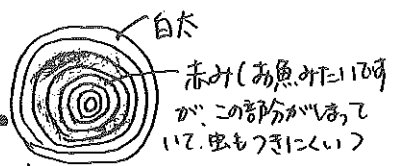
日本の森を守るということは、林業に税金を注ぎ込んで人工林を守ることなのか、環境林としての天然林を保全していくことなのか、また、人工林を大事にすることが、即ち森林の公益的機能を守ることになるのか、一般の納税者には殆どよく判らないのです。

そういう疑問について、余すところなく国民に情報提供を行い、討論し、国民と一緒に森造りを考えて行くことこそ、真に日本の森林を回復する手段なのです。

次号以下で、その点を皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。

(続く)

今、日本の森もあぶない!



しりりっ
奈良は川上村。木匠塾フォーラムに
参加できるの巻

吉野のナツメ年輪の間隔が狭く規則正しいのは、やはり年輪を
おしよ"大切に育てられた。あかし。

うーたん会員 おーむらひろこ記

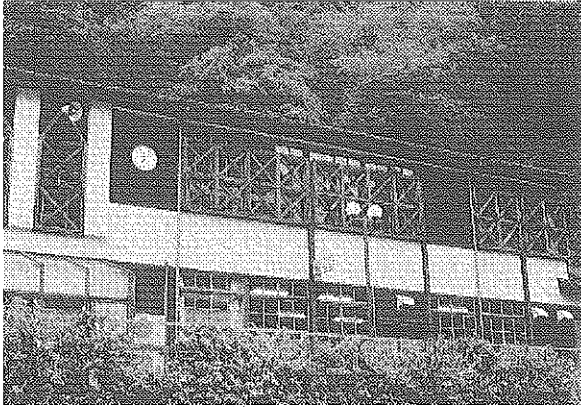
◎ フォーラムの主旨を要約すると、日本の
森林は都市住民の生活を支え、国土を守り、
日本特有文化を育んできたが、林業は
構造的問題を抱えている。再生可能な
木材を使った木造住宅も木造率50%に
こつて。今、木と建築の関係について、99%の
人に学んでもらいたい。日本林業の聖地、
川上村でフォーラムを開催したいと思う。

本来のえき場もとり戻し農作被害をおとせる
ことも可能じゃないか。過疎地も、杉・檜
を植林するとおける補助金に頼らざるも
えたいとよく耳にしよか。減反で米を作
らばよくはつて荒れた土地や川の沿岸の
ギリギリまで造林し、手入れをせよ。暗く
荒れた放置林を何度も見ると、NGO
も協力して、何とか生きて森に戻せよ
ものだろうかと思ってきました。国産材が
市場競争力をつや、適度な年月で切り出され
又、植林して計画再生していつかは、これ
以上天然林を伐採して人工林を拡大する
必要はないと思うのよ。私達が行政
や、林業家の方々と協力してシステムをつつ
いかばいつかはいつかいい時ではないか、
と、本来へ何を残そうとしているのか(今は、
ツツはかりが残りせー)、何を残し
たいのか、よく考えて生活を変えていく必要
が、ありそうだと、こちらで、おしよに考え
直さばあかんのとちやうかばあ、と、思っ
てあり、このフォーラムにのぞいたのは、

さて、ここで、日本の森林とおしよか、あつては
とらば森を頭に描かばあか? ここで
いう産業としての森は、杉・檜等、主として建築用材
として人工的に育成された針葉樹材の人工林。
生命を右取り、はぐくんできた原生林や天然
林から、私達は多くの山の恵みを受けてきた。
イメージしたのは、美しく手入れされた杉並木
や、ブナ林の明るい輝きに満ちた森、家の
近くの里山の森、いろいろでしようけれど、同じ
森でもその役割の違、環境に与える影
響の違、と、つての方々が認識されて
おられることでしょうか。針葉樹材と広葉樹材
では、生命の収容力に大きな差があることは、周
知の事実とおしよか。戦後の復興等の
理由で、全国で人工林の拡大が行われ、今
も続いています。3.8兆円という累積赤字を
抱え、転換が求められている今、日本全体の人工林
率を野生動物が生息できる割合に戻し、針
葉樹材を保護するばかりではなく、広葉樹材との
健全な配合が必要と。そのためには、
表土流出を防ぎ、石けり方などに巨額を投じる事
も、川や海を健全にし、野生動物は

(あー、つんと長い前あき)吉野は美しい。
あの美しい川に2つめのダムが、できるそうよ。
つて、むくむく館(川上村林業資料館)で
このように森を守り、育て、吉野ブランドという良
質の木材がつかれるか、楽しくおもしろ。
川上村は97%が山林。こゝは、降水量と
太陽光量が良質のナツを育てるのに適した
土地なので、97%の山林のうち、天然
林はその位、残っているか、つて、

やはり、木の建物はいい。トイレも木を
ふんだんに使っていて、さゆやか。木の香り。
木肌、足ざわり、木は、やはり、「いやし」の
作用があるのを実感する。木工館では
家具の販売や、別荘棟(この建物が古びた
感じとデザインはあつさりして、とても好き)
で、自分でスリッパをすることもできそう。
やはり、遊びにきたい、スポットじゃ。



◎ 基調講演「木匠塾の活動について」
塾長・東洋大学工学部教授・久田邦夫氏。
私がびっくりしたのは、建築を教える大学で
は、都市開発・公共建築・官庁施行管理者
の育成が中心で、木工造りというものが
1つおいとまっていたことでした。日本人が、日本の
在来工法を学ばせに誰が学ぶというの
だろう。1級建築士の第一号が田中角栄だ
だということを知ったとき、ほめられた様な
気がしたもんじゃ。そのときの気持ちと
なぜか、思い出。時代の移りかかりと
環境の変化に合わせて、教育内容を見直さ
ないといけないのが、現場ではさかしていないのであ
らう。建築関係が環境に与える影響を
与えているか、どういった建築が望ましいのか
大切なことじゃ。これではいやだし、木
の文化をキーワードに6つの大学の合同合宿や、
2001年には、環境物造りの理念で、
大学ができるように、17.1つとある。

余談じゃが、私は建築CADを今、勉強して
その専門技ではさちんと木造建築もやり
たい。輸入材は成長が早く安価じゃが、
白木が多く、木としては蒸気、虫がうき易いので
薬品処理が施されること。国産材は、虫
密で、害虫が多く、やはり虫がうきにく
く、使用寿命が長く、日本の風土に合った材で
あること。シックハウスが問題になっている今、
健康住宅として見直さるべきじゃと。
たつた3ヶ月間のコースのカリキュラムの中で
こういった話をまくことが出来ます。

◎ フォーラム「木の文化と木造建築の可能性」
5人のパネリストの方々が、MS建築設計
事務所主宰の三澤康彦氏のコーディネート
により、各地での問題点と取組みや
成功事例が紹介された。2時間半は
少し短かった気がしますが、とても興味
の持てる内容でした。こういったフォーラムを
消費者団体と行うことも必要だと感じました。

● 岐阜県加子田村長・張川真策氏は
産直住宅の施主も村へ招待し、記念植
樹イベント交流会をもち、大黒柱を贈呈
してあげました。その結果、全国で産直
住宅として注目。私がとても実感し
たいポイントであったのは、環境としての林業
を実践してあげること。「山の尻根に
は、広葉樹を植えよ」という昔からの
伝統を今も守っているとのこと。





● 川上村 森林組合 専務理事の
南本泰男氏の話では、吉野グラウンドでも
単価が下がってきていること、長い年月をかき
育てるため、苗木産業が衰退し、幼木育成
技術者の減少が危ぶまれているとのこと。
また、100年200年もの大型木が増える
と、それを伐採する技術者の継承が
おぼろしくなる等の問題もあげておられ
ました。

デイスカッションでは、吉野グラウンドにこだ
わりが強い。ランクモウシマダに使いやす
い価格の材をもっと関心おやり方又出さ
ばばという話も出ました。(消費者 喜び)

これから抽出出来るのに、ローコストでできる技術
をもっと考察できたいものではないか。

四国でトングリ銀行をつくられた方は、地球
を便しておられました。つや。

とにかく、日本の森を健全に活性化させる
こと、世界の森に負担をかかさないことと
あると思うのです。

良いものを長く使う。何を私達消費者
は基準にして、ものを選ぶのか。

消費者も、環境をキーワードに、消費を
考え直すのは「ほんらいの時代」と思っています。

メーカーの環境へのとくみへの評価を購花
という形で表わすことも思っています。

今後住宅メーカーも、こうした取り組みへ参加
してもらいたいものです。

私は、時々、広葉樹の不適材タイプに
参加しています。各地でこうしたとくみが
行なわれていいますが、林業家の方で興味
をお持ちの方がおられましたら、ぜひご報
下りませ。

今、卒業課題で住宅を設計したいとい
うのですが、私は、野生動物の被害で
商品の価値が低くおるといえるキズ
のある材をどこかで使いたいと思っ
ています。たとえば、クマハギに合うと、とても
面白い年輪がでます。

① キズの
つやらかさとも、また
使われて育つものもあるのです。② キズ
は、雨が入り、かさしてしまうものもある
という。そういうものは、よく切り出して
使おうという。コストは、無視しな
り、景観的価値は、ある。

これを、獣害といいますが、本を育てる課程で
人工的にナラをまいて、木肌にもお
つやに、ある床柱がある様に、私は天然
クマハギ造材と称して、価値の中で
使おうと思っています。専門家から
みると、無知なことをおしやしませんか！
今必要なのは、発想の転換なのでは
ないでしょうか。③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

注) クマハギ：ツキノクマ(本州に
生息)にみられる行動で、スギヤサワ
などの種皮をほいで、開き、腐食を
おこす。北近畿地方にある現象です。

最後に読んでいただきありがとうございます。永田さん
の稿が、あんな大層ご迷惑をおかけした

フォーラム 「木の文化と木造建築の可能性」

まとめ：山猫屋

去る5月30日、奈良県の川上村で「木の文化と木造建築の可能性」と題するフォーラムが開かれました。国産材の利用と住宅問題、環境問題も視野に入れ、活発な意見交換がなされたこのフォーラムから、その内容の一部を紹介します。（主宰：川上村）

▷コーディネーター：三澤康彦氏<

(Ms 建築設計事務所 主宰)

「私たち建築家は一般の人々の中で家造りに携わっていますから、木を無駄にすることなく、上手に一般の住まい手に木の文化を引き渡したいと考えています。環境問題から考えても、材木は建築材料の中で唯一再生産できる資源です。」

「やはり、農業と同じように林業は産業です。手入れが欠かせません。ただ置いてただけではダメです。腐らせたり無駄にする前に、人間が有効に使わせていただく。」

今の量産住宅のように18年から20年でスクラップ・アンド・ビルド（潰しては建て潰しては建て）ではなく、せめて我々が住宅で使う木に関しては、20年で終わらせないようにできることはもっとたくさんあるはずだ、と考えました。」

「昔から、外材と言って、北米材やロシア材、北欧などが、建築用材として安く出回っています。私はそれを疑問に思っています。あれらの木は寒い地域、日本に多い白アリや腐朽菌のない地域の木ですから、それをそのままアジアモンスーン気候の中にポンと置いてしまうとやはり腐ってしまうと思います。」

国産材でやっていけば、山も活気づく。山の環境、水、空気を、また我々が美味しく頂ける。そういう形でうまく循環できるんじゃないか、と。私はそう思っております。」

▷パネリスト：粥川眞策氏<

(岐阜県加子母村 村長)

「加子母村は13年前、私がまだ村長になる



前ですが、産直住宅を始めました。村で生産した材を村の製材工場で引き、それを材料に都会へ出て行って家を造ろう、と始めたわけです。この産直住宅は、後ろに製材業、また林業を負い、さらには林業につながる山の自然を引っ張っています。」

始めた時に、村の材で建ててもらうのだから大黒柱を贈呈しよう、ということで贈呈式をやりました。譲渡式には村から担当の課長と村長、助役が出てゆきました。そうしましたら、別に保障しとったわけでもないのですが、施主さんの方では村がきちっと保障してやっている、と大変信用を得たわけです。また業者の方も、これは後で不信を買うようなことをすると大変だ、村の名誉に係わる、と大変一生懸命になってくださいました。」

それが評判を呼びまして、どんどん受注が増えてきました。そうして3年か4年経ったところで、県がその実績を取り上げ、県の産直住宅が発足しました。最初は岐阜県産直住宅建設促進連絡協議会という長い長い名前でしたが、昨年からは産直住宅協議会という名前に変えています。」

「当村でも何とか、ほとんどホルマリンが出ない接着剤を使った製品を出せるようになり

ました。50年や100年も長持ちさせるためには当然です。そういう目的でやっておりますが、上手くいくかどうかはこれからの我々の努力次第であると思っております。」

「そんなわけで、私たちの建てる住宅が村の自然とつながっていることまで都市の人たちにしっかりと分かるかたちで、林業と住宅産業に取り組みたいと思っております。」

▷パネリスト：和田善行氏<

(林業家、TSウッドハウス共同組合専務理事)

「このTSのTというのは徳島、Sは杉です。だから、富山の杉もTS、東京の杉もTSかもしれませんが、私たちが一番最初にTSと使いましたので、TSウッドハウスは徳島の杉ということでお見知り置きください。」

TSウッドハウスも、ウカウカしていると市場で6000円や8000円で木を出せる九州材に負けてしまいます。うちの山は40度、45度の傾斜で山を育てており、九州の丘のような、機械化ができる山地との競争では、生産コストからはどうしても勝てません。私たちは、自分たちの木は彼らよりも古い木がある、それを生かそう、ということで、杉の需要開発に約15年間、ずっと取り組んできております。

かつて、私たちは建設現場で使う足場板を扱っていましたが、でも、建設現場の材は結局3年でダメになるそうです。私はその木を60年かけて作ってきているのに、3年で処分されるされるのが本当にいいのか、と。私は育てる側の人間ですので、ちょっと許せないと感じました。やはり私たちの木はせめてその木が育った樹齢位の年月は役に立つように長く使って欲しい、ということで、建築用材にするべくかなり頑張ってきました。

建築用材は、乾燥と強度という2つの問題点をクリアする必要があります。私たちは、この2つのテーマに対して約10年間いろいろな試験研究をし、ある程度自信を持ってと

ころまでこぎつけました。そういう活動の中から、共同組合をつくったわけです。」

「強度や耐久性から、60年生という樹齢の最低線、葉枯らしといって伐っても葉をつけたままにして水分を蒸発させる方法、向き不向きを考えたその用材の適切な選別など、どれもきちっとやっています。それから、一番強度のある形で木取りをします。山で約3ヶ月の天然乾燥をやった後、もう一度厳しく品質を見ながら検品し、出荷します。」

一番の問題は、ユーザーがその3ヶ月を待てるか、ということです。どうしても端境時期がありますし、今木を動かすと虫が入る、だから時間がかかる、ということをユーザーに説得する必要があるわけです。

そのために、伐採ツアーということで、山にご案内し、製材から乾燥まで全てを見せます。時間がかかるのはそのお施主さんその人のために木を伐りその人のための製品をこうやって乾かしているのだ、ということをやんと見せます。で、納得してもらいます。

その時にもうひとつ見てもらうのが、モデルハウスです。そこで、木材の欠点である割れや狂いなどが未乾燥だとどうしても出てくる、それを防ぐためにはこれだけのことをするんだ、と全部見せます。私たちの仕事をひとつずつ見せて、納得していただける場合だけ仕事を受ける、ということをしています。

ですから、市場価格にはあまり影響されません。それ以前に契約をしているわけです。市場価格が上がる場合も、別に私たちは値段を上げませんし、下がった時も下げません。だから、ある程度のリスクを回避できます。」

▷パネリスト：林 昭男氏<

(滋賀県立大学環境科学部教授)

「私は、かつて40年もの間、設計を本業としておりました。そのほとんどがコンクリートの建物でした。10年位前までは環境と建築の関係については全く考えず、好きだった

コンクリートの建物をバンバン建てていました。ですが、コンクリートの建物を造るときに型枠として使う材の浪費が非常に問題である、ということを知ったのです。

型枠材を産出しているマレーシアのサラワク州の方が日本に来た時に「日本にはこんなにたくさん森があるのにどうして私たちの国の木をみんな伐っちゃうのか」ということを言われました。別の機会に、アマゾンの人からも「日本人はとっても罪深い、どうしてそんなに木を伐ってみんなダメにしてしまうのか」ということを追求されました。

それらのことから、これはいかに、と考え直したことが、私の建築の転換点になっています。そして、日本の豊かな木をどう活用していくかがこれからの地球環境問題のキーポイントでは、と思うようになりました。」

「皆さん最近あちこちで、持続性、サステナビリティということばをよく聞かれると思います。これは、環境破壊の問題を考えた時に私たち人類がどうやって次の時代、100年200年あるいは1000年の将来にまで生き続けられるのか、そのことを考えるためのキーワードです。

このことは今、デザインにも求められていると思います。環境への負荷をできるだけ少なくするデザイン、それがサステナビリティに富むデザインだと思っています。

そう考えていきますと、木というものは最もサステナビリティに富んだ素材です。コンクリートやガラス、アルミといった素材は、作るときに大量のエネルギーを使います。そして製作の段階でも、莫大な量の炭酸ガスを発生させます。ところが木は伐りやすく、成長の時には炭酸ガスを吸収して炭素を固定していく役割さえ果たしています。

その他、川上村森林組合の南本さん、東洋大学工学部教授の太田さん、そして会場の参加者からも熱心な意見が次々と出され、今後の日本の森林問題への取り組みの必要性と展望を提示し、フォーラムは終了しました。

ですからそういう性質を持った木を改めて見直し、建築の中へ取り入れていかなくてはいけないのではないかと思います。実際、これからの時代こそ木の文化が本当に問われる時ではないか、と思っております。」

「取り壊した木造の柱や梁などを、いかにしてもう一回使えるようにするか、ということを考えている解体業者の方がいることを比較的最近知り、非常に興味が沸いたので、群馬県まで見に行ってきました。

そこでは解体した素材を全て70センチ位に切り、保存場所に積んでおいて、最終的な製品としては長さが60センチ、背が16センチ、厚みが8センチ5ミリのブロックに作り替え、そのブロックにホゾ穴を掘り、それをただ積んでいだけで使える、小さな空間でしたら素人でも簡単にできてしまう、そういう製品にしています。これは、なかなか面白いなと思いました。クギを抜いたりささくられた部分を補修しなければならなかったりと結構大変だそうですが、商売の方もそこそこにいけるようになったと言っていました。

その廃材は脱水率が12%以下です。とにかくしっかり乾燥しています。また仮に、その家が使いにくいので壊したいという場合にも解体が可能です。クギを一本も使わないで壁を作り上げていますから、解体して別の所へ持って行ってまた使えます。そういうことも、魅力として大きいですね。

今後は、吉野のような立派な高級材は4本くらいにして、後はもう雑木ばかりで造る家がどんどん伸びてくるのではないかな、と思っております。

そんなことで、木をいかに使っていくかが、今、私たちに果たされていると思います。」

「環境教育のホリスティックなアプローチ」の分科会に参加して

日本環境学会第9回大会

「ホリスティック」とは、ギリシャ語で「ホロス」(全体)という言葉が語源である。同じ語源を持つ言葉に「ヒール」(癒し)、「ヘルス」(健康)、「ハウリイ」(聖なる)という言葉ともその深いところで関係していると言える。ホリスティックな世界観では、すべてのものは何らかの仕方であらう存在であり、ひとつだけを切り離して考えることはできない。人間を知的な存在であるだけではなく、身体、感情、直観、思考、精神のすべてを総合した存在としてとらえ、教育の手法としては、ダンスやボディワーク、芸術活動や物語創作、瞑想やグループワークやボランティア活動など、多種多様なアプローチが積極的に用いられる。

「私につながるすべてのいのち」・・・
 ・このような心の有りようを回復できる教育をどうしたらできるのかといつも悩む。ホリスティック教育を推進されている、大阪女子大の吉田敦彦先生から出された提言は、私自身がこの何年か悩み続けてきた問いだった。

現在の環境教育の分野では、まず、目の前の環境破壊があつて、それを早急に解決できる人材作りのための教育が模索されている。吉田先生は、この手法自体を問われた。ウータンの市民啓発や市民講座を持つときにもこのような手法が多い。もちろん環境破壊はすさまじく、私にも焦りがある。しかし、私達の心の病んだ有りようはこの環境破壊はコインの裏表の関係にある。心の病と環境破壊の根は同じものなのだ。この心をつめながら、人とのつながりや外の世界(自然界)とのつながりに気づいて目覚めていくプロセスを経て、環境の破壊に対する行動へと心が向かうようなあり方を求めたい。

現在の教育や社会のシステムで勝者となった大人ほど環境破壊に荷担していると怒る不登校の生徒の詩が紹介された。この少年は、教育や社会のシステムに問いを投げかけている。この少年に、環境

教育として効率的に環境破壊の現状や破壊を守るためのノウハウを教え込んでいくなら、この少年の心はさらに深く傷つけられていくだろう。まず、この少年の心に寄り添うことから、大人は始めなくてはいけないのかもしれない。この少年のようにはっきりと拒否感を打ち出せなくても、今の若い世代の心のどこかにこのような怒りや不信感がくすぶっているのではないだろうか。

私は高校の国語の授業で宮沢賢治を十年ほど教えてきたが、賢治の世界が最近の生徒の心を癒しているのではないかと感じている。十年ほど前は、賢治について興味が無い生徒も多かった。「農業」や「田舎」と聞くだけで興味が失せた。ところが「童話」と馬鹿にしたようなところが、こちらが熱心に語ると奇異な目で見られた。ところが、多くの生徒が賢治の世界に魅了され、賢治の考えや感覚に憧れを持つ。私が環境破壊について触れなくても、生徒は環境を破壊して生きる人間の有りようを振り返る。自分自身が破壊に荷担して生きている存在であることに気づくということが起こってくる。

賢治の世界は、深く他者や他の生命体、果ては宇宙にまでつながるといふホリスティックな感覚を持つものだと私には感じられる。賢治自身、そういう作品世界は、林や、野原からもらったもので、風が吹くとそんな話が聞こえてくると語る。賢治が自然界と本当に交流ができる存在だったので、その「声」は生徒の心の奥へ直接に響くのもかもしれないと、この頃感じている。特に自分で朗読をするとその「声」が心へずんずん入り込む。そんな話をさせてもらったら、その分科会には賢治の生き方に惹かれた方がおられて、私に名刺を渡しにきてくださった。「木偶工房」という組織を作っておられる。「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない。」という賢治の生き方に憧れていると言われた。「もっと肩の力を抜いて楽しくはめをはずしていきましょうよ。」とも。たった、5分ほどの立ち話でも、大変深い出会いに恵まれた。また、分科会の中で、環境教育とは、『負い目を持ちながらどう生きたらいいのか。』という人間としての生き方ではないか、と言われた方もいた。賢治も自分を「修羅」と呼び、自分の中の醜い心をつめて生きた。

私にとっては共に考え、心を分かち合うことのできた素敵な分科会であった。

(委員： 奥村知穂子)

『おたよりから』（敬称略）

- * 皆さんのお仕事に敬意を表します。（カンパを）わずかですが…。
宇治市 樋田たかし
 - * 心にうるおいを与えてくれる通信をありがとうございます。
貝塚市 山口八千代
 - * いつも通信ありがとうございます。読むだけ読ませてもらって会費を払わずでした。97, 98年度分とカンパを送ります。
大阪市 海沼・中岡
 - * 会費&寄付少額ですが…。アマゾンの方も色々大変ですが地道に支援活動を続けています。
熱帯林保護団体 南 研子
 - * やぼ用が多く、なかなか顔をだせなくてすみません。「大阪ごみを考える会」の活動だけは続けています。
吹田市 千代延明憲
 - * 2月に頂いた通信を5月連休に開いたものですから、フライブルクの話の聴きのがし残念！
西宮市 宮澤朔子
- ※総会でのフライブルク報告は、講師の都合で中止になり、代わりに大田伊久雄さんにヨーロッパの森林事情を話していただきました。フライブルクの方は、連続講座で…と考えています。（事務局）

- …【会費・カンパをいただいた方】（敬称略） 98. 6. 15まで
- | | | | | | |
|------|------|--------|-------|------|------------|
| 一村和幸 | 一鷹要市 | 伊東万千子 | 岩田鐵夫 | 祝美津子 | 牛島美成子 |
| 太田敏一 | 小野隆史 | 海沼・中岡 | 鑄木里子 | 康由美 | 北本一郎 |
| 慈弘 | 木村久吉 | 齊藤誠 | 阪本守 | 汐見文隆 | 下山久美子 |
| 高橋敬一 | 谷一能 | 辻秀之 | 樋田 | 永田康二 | 日本ウッドワーク連盟 |
| 橋本崇央 | 平井英司 | 藤岡正雄 | 堀口和恵 | 松井秀樹 | 南研子 |
| 子 | 森みどり | 麦島きみ子 | 山口八千代 | 山田睦美 | 山田光一 |
| 一 | 由良行基 | 周 横田憲一 | 吉井玲子 | 蓮原耕児 | 和田善行 |
- （TSウッドハウス）\田中順子（美しい切手を沢山ありがとうございました！）

【裏返し封筒ありがとうございました】（敬称略）

- 青木恵美子「90歳になるおじいさんが裏返しをしてくれました」
梶川雅子「封筒を送ります。最近では京都ではお天気が変なので何か心配です」春日美恵子さんからも沢山いただきました。
- ☆「ウータン財政ピンチ！」の呼びかけにこたえて、会費・カンパをありがとうございました。自分も活動をしておられるなど、大変な中からのカンパも多いと思います。ひたすら感謝！！
- いっくPR：『熱帯林連続講座inとよなか』報告集（500円+送料190円）
（残部僅少） 申し込み：（切手可）☎560 豊中市玉井町2-4-35-306
井下祥子（06-841-8221 夜）

【よんでみませんか？】

- 『環境破壊のメカニズム』地球にくらす地域の知恵 田中優 北斗出版
自動破壊システム／誰が地球をまもれるのか／分散型社会にむけて
『熱帯雨林からの声』蘇生する民族の証言ブルーノ・マンサー 野草社
- ★★12年使った家具が壊れました。ホッチキスと接着剤の、ヤワなつくりです。やはり安物買いはアカン！家具職人・永田健一さんのアドバイスで、ネジ釘どめに。

HUTAN ACTION SCHEDULE

葉書キャンペーンのお願い!

「サラワ7州ビントウルの大規模樹木プランテーション計画」
に抗議の葉書をおくって下さい。

◇今号に同封したハガキの日本語訳を書いておきます。

アブドゥル・タイブ・マハムド様

拝啓 私はボルネオ・パパイア&ペーパー社によって、サラワ7州ビントウルの
ウル・パタン・タタウに造成されようとしているパルプ紙工場と広大な樹木プ
ランテーション（シンガポールの5倍以上の広さ）の社会的、環境的影響への
深い憂慮を伝えるために、この手紙を書いています。計画されている373700
ヘクタールのプランテーション用地の内、16%（60000ヘクタール）以上の工地区
約17,000人の先住民族（ほとんどのジャバヤン人）の先住慣習地です。
住民の生活は同世代にもわたりこの森林に高度に依存してきました。約束さ
れた補償を受け取っていない、又再定住地を提供されていない住民は自分た
らの工地区の権利の承認と補償、そして慣習地への侵入に対する裁判所の
禁止命令を求めています。

私は関係する先住民と弁護士、学者、NGOなどで構成される第三者的な
委員会が同計画が与える社会、文化、環境、経済その他全ての影響を完全に
見直し、その委員会の報告がまとまり、実施されるまで同計画を停止することを
緊急に要請します。

敬具

署名

◇お知らせ◇

1998年世界熱帯林週間（10月15日～25日）に合わせ ウータン、熱帯林
きょうと、奈良熱帯林保護ネットワークが呼びかけ人となり実行委を組ん
で大阪で少し大きな集会を拵とうと計画中です。

会場の関係で日時は予定ですが10月18日や25日にあるつもりです。
講演や分科会も含んだまる1日の集まりです。賛同して下さい方、
実行委に参加してくれる方は個人でもどうぞ下記までご連絡下さい。

皆なで守ろう世界の森林!!

【お問い合わせ】 0722-52-0505 面岡まさく(夜間)



ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】 〒530 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel.06-372-1561

【一部】300円 【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

◎購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◎ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。